

ワークショップ「モリスコ研究の現状と課題」

参加記

竹下和亮

当日の議論では多岐にわたる論点が提出されたが、紙幅の都合もあり、そのなかから特に (1)モリスコとはなにか (2)モリスコ問題の起原 (3)モリスコの移動、の三点を中心に感想を述べてみたい。

まずモリスコとはなにかという点についてであるが、この問題は、おそらくモリスコ研究の核心に位置している。というのも、そもそもモリスコについて研究をおこなうためにはある人物や集団をモリスコとして同定してその足跡を追わなければならないが、第一にその当の研究対象たるモリスコの同定が容易ではなく、そして第二にまさにその種の困難さこそ、当時のモリスコのおかれた独特の位置を明瞭にあらわしていると思われるからである。このように問題を整理しつつあらためて当日の議論をふりかえってみると、モリスコの同定が困難であるというときには、つぎの二つのレベルを考えなければならないということを感じる。

まずはモリスコの存在や経験を実体的にとらえたことではじめて生じる困難である。たとえば、旧キリスト教徒とのあいだに結ばれる複雑なソシアピリテの交錯その他の要因によってモリスコを明確なかたちでは抽出しがたい場合などが考えられるだろう。逆に、ある特定の地域にモリスコが集住していることが明らかであったり、かれらがある社会階層と結びついていたたり、追放の過程を具体的に追うことができる場合にはモリスコを同定することが比較的容易となる。

つぎにモリスコを同定するさいの二つめのレベルの困難とは、表象としての「モリスコ」を問題とするときに生じるものである。つまり、王権によるモリスコの同定と実体化 対モリスコ政策を実行するためにはモリスコを特定して実体化しなければならない。そのものをひとつの「モリスコ」表象のかたちとしてとらえ、そのような表象をうんだ社会力学を探ることにそなわる困難である。この場合、まずなされるべき作業は、「モリスコ」なる語がいつどのように発生し、各時代の文脈においていかなるかたちで使用されたのかを追うことであるが、今回のワークショップにおいては、語の起原をめぐるいくつかの仮説が紹介され、つづいてモリスコということばがすでに中世に使用されていたこと、場合によっては「グラナディーノス」や「アンダルシーエス」という呼称によってとって代えられたこと、またモリスコについての厳密な定義をはじめて与えたのは 1525 年のグラナダ異端審問であること、などの具体的な事実の確認がおこなわれた。それらの確認をうけたのち、では、もしそれまでもモリスコということばが使用されていたのなら、なぜこの時期の新キリスト教徒をモリスコと呼びはじめたのかという問題提起がなされたが、この問いがしめしているように、まさにこの時期、ある一定の社会力学のもとで「モリスコ」をめぐる新たな表象システムが誕生したのである。中央集権的な行政能力を高めていく王権やそれと微妙な緊張関係を保ちつつ協同する教会勢力が、半強制的に改宗させた元ムスリムの信仰の内実を疑い、そのこころの奥底までも徹底的に見通したいという途方もない願望にとりつかれてしまった。そのようにして、改宗の後はずばからく「キリ

スト教徒」であるはずのものたちに向けて、かれらは「モリスコ」をめぐる表象システムを始動させていく。そしてそれがまさに、とうてい知り得ないはずの宗教的アイデンティティーの内面をとりわけ問題にする初期近世に特徴的な心性から生まれたものであるがために、モリスコの同定は、知り得ないものを知るといふ、この時代の強迫観念に規定された独特の困難さをおびることになるのである。

重要なのは以上に述べた二つレベルを対立させることではなく、それを、表象にたいして抵抗したり、屈服したりする経験的世界 シャルチエにならって「表象としての世界」といってもいい がもつ堅固な性質をとらえる、というふうな再定式化したうえで厳密な実証をすすめていくことであろう。そのようにして、わたしたちは、追放のための手続きや追放者数の確認、追放の賛成者と反対者の確定、また文化変容過程の追跡などの作業を、表象としてのモリスコにせまる手段として組み込むことができるようになる。

当日の議論のなかでは、対モリスコ政策における王権やシスネロスのイニシアチブをめぐる評価 モリスコ問題の起原 も話題になった。この問題は、端的にモリスコ表象をうみだした社会力学についての問いである。こうした広い意味での政策決定をおこなう現場にはたらく行政的-宗教的力学を、スペイン世界独自のコンテキストで明らかにすることは決定的に重要である。またよりローカルなレベルでのモリスコ表象をめぐる力学について知らなければこの問題について十分な理解はのぞめない。だがいうまでもないことではあるが、初期近世のエリートたちが民衆の信仰実践にたいして異常なまでの関心をよせはじめたことも、また時代の趨勢が求心的な権力秩序を求めたことも、なにもこの地域に限ってのことではない。いわばヨーロッパ全体に広くおこった精神史における一大転換が、スペイン世界においては「モリスコ」問題というかたちをとるのだと考えることもできるのである。モリスコ研究には、このような空間的な重層性を考慮する必要もある。

モリスコ問題にたいしては、より広域的な時間と空間、またそのそれぞれにそなわる重層性を用意してやることもできる。いわば「モリスコ」表象にともなう力学の射程を見定めようとするものであり、今回の議論にそくしていえば、トルコ世界との関係においてとらえられる追放と移住のソシアビリティのかたち、また現在までおよぶモロッコのアル・アンダルス音楽（いわゆるアンダルシア音楽）の存在形態などのテーマがそれにあたる。かつて、ブローデルはモリスコ問題を地中海世界全体のネットワークのなかに位置づけたことがあったが、そもそもかれにとってモリスコ問題とは、なによりも文明と宗教の衝突の問題としてあったように思われる。だが今回のワークショップでは、こうした「文明の衝突」論にはかならずしも収斂しない議論が展開されており、筆者は、地中海世界におけるモリスコの交流のありかたをかれらの可変的アイデンティティー 自己アイデンティティーの構築 の相の下で読む可能性について思いを馳せることができた。この種の研究には、対象の時空間を広げることにもなう多くの困難があるかとも思われるが、いま現在の世界のアクチュアルな状況とのかねあいにおいて今後ますます発展する分野ともいえるだろう。そのための体制づくりも国家や宗教の枠を超えて着実にすすめられているとも聞く。筆者の専門であるフランス史からも、それ相応の応答を強く求められるように感じた。